

論文内容の要旨

報告番号		氏名	榎本 浩士
Prognostic importance of tumor-infiltrating memory T cells in oesophageal squamous cell carcinoma 食道扁平上皮癌における腫瘍浸潤メモリーT細胞の予後因子としての重要性について			

論文内容の要旨

【目的】感染防御にメモリーT細胞が重要であることは以前からよく知られている。しかし腫瘍免疫におけるその意義は未だ十分に明らかとはなっていない。本研究では、難治性消化器癌の代表である食道扁平上皮癌におけるメモリーT細胞の臨床的意義を明らかとすることを目的とした。メモリーT細胞の表面マーカーであるCD45ROに着目し、腫瘍内浸潤CD45RO+メモリーT細胞を評価、検討した。【対象と方法】1995年から2007年までに当科で根治手術を施行した食道扁平上皮癌患者105例の摘出標本を用いて、抗CD45RO抗体による免疫組織染色を行った。腫瘍先進部に浸潤している腫瘍内浸潤CD45RO陽性細胞数をカウントし、平均値をcut-off値として高発現(hi)群(54例)と低発現(lo)群(51例)の2群に分類した。2群間における臨床病理学的因子、術後生存率、再発形式について比較検討を行った。【結果】年齢、性別、進行度、深達度、リンパ節転移の有無、遠隔転移、リンパ管侵襲、脈管侵襲の各臨床病理学的因子において両群間に有意な差を認めなかった。術後全生存率および無再発生存率において、両群間に有意な相関がみられ、CD45RO+hi群の予後は有意に良好であった(P=0.006)。1, 3, 5年の生存率は、CD45RO+hi群では86.8%, 60.3%, 45.1%であるのに対してCD45RO+lo群では、62.7%, 32.8%, 24.3%であった。CD45RO+hi群では、lo群に比較し、無再発症例が有意に多かった(P=0.036)。再発部位別では、リンパ節再発症例、肺転移再発症例において同様の結果であった(P=0.048, 0.039)。多変量解析では、T因子、N因子、CD45RO+ statusが独立予後因子であった。【結語】食道扁平上皮癌において腫瘍内浸潤CD45RO陽性メモリーT細胞数の多寡が、従来のTNM因子とは独立した予後因子であった。メモリーT細胞を中心とした獲得免疫機構が、食道癌の転移、再発などの臨床経過に重要な関与を果していることが示唆された。